

■■■ 2015国際交流基金地球市民賞を受賞して ■■■

この度KFCは、国際分野において権威ある2015年度の国際交流基金地球市民賞をいただけることになりました。これもひとえに日ごろからKFCを支えていただいている会員、支援者のお陰です。あらためて感謝もうしあげます。

私たち特定非営利活動法人神戸定住外国人支援センター（KFC）が設立する契機となった1995年の阪神・淡路大震災から20年目、2015年の地球市民賞をいただけたことは単なるめぐりあわせではなく、この20年という時間に自分たちが考え実践してきたこととが、今の社会に必要なことだと励ましてもらえたようで感慨ぶかく受け止めています。

この20年間、日本と世界で起きたことを振り返ると、1990年代初頭に語られていた世界の国境が低くなり、多様な価値観を認め合う市民社会が訪れるという明るいグローバル化社会像は、現実と乖離したことであったかのように感じます。

日本ではリーマンショック後に全国各地で起きた日系南米人（ブラジル人、ペルー人ら）の大量失業と貧困問題、その結果、多くのブラジル人らが帰国、右肩上がりで増加してきた在日外国人が減少するということも起きました。加えて2011年の東日本大震災もあり、在日外国人の帰国も増えました。

不当な賃金搾取や度を越えた長時間労働、虐待などが頻発する人権上問題の多いことが明らかになっている外国人実習生制度が拡大、受入数も激増し続けています。

また韓流ブームが、幻であったかのように偏狭で排他的なレイシズムを基盤にした在日韓国・朝鮮人らへの蔑視・排除を街宣するヘイトスピーチ・ヘイトクライムの発生と拡散も続いています。

地域では、高齢化した在日コリアンや中国残留邦人帰国者らの受け皿施設の不在、外国にルーツを持つ子どもたちが直面している低学力、学校不適応、進学の際が顕在化するなど、在日外国人、民族的少数者が直面する困難な状況が明らかになっています。

世界では、中東、北アフリカ、中央アジアの戦乱や混乱が収束することなく続き、過激思想が台頭したことによる社会的混乱も含め、故郷の荒廃によって難民となった人々が、欧州へ新しい生活の場を求め大量に流入しています。

過激思想が、先進国にも拡散し移民の子ども世代がテロ活動に関与したこともあり、人道的な受け入れで、先進国も歩調を揃えられず自由や人権という普遍的価値を生み出した欧州が、難民受入、テロへの恐怖で揺れています。

排外的な重い空気が欧州、世界を覆いつつあります。

背景には、人種主義、民族差別、ステレオタイプな他文化理解を克服できないまま進むグローバル化によって広がる格差と固定化、気候変動によって南の国が被る生まれた土地での暮らしが成り立たないという構造的な問題も横たわっています。

欧州のように長い時間をかけて作られてきた移民理解、移民政策を持たない日本では、移住者、移民が直面する課題は海外のことであり、いまだ関心は低い状況ですが、先に書いたように日本においても実態は、同様の移民問題が進捗しています。

この20年間のKFC設立からいままで私たちの歩みをふりかえると、私たちKFCの事業には、いわゆる「国際交流」の要素は、ほんの少ししかありません。また私たちは、阪神・淡路大震災以降、潮流となったうつくしい響きを持つ「多文化共生」という言葉もほとんど使いませ

ん。日々自分たちの事業を通じて「多文化（多くの文化）」は「他文化（他者の文化）」でもあることを受け止め、どうすれば人は他者を排除せず生きていけるかを考え苦闘しています。

KFCの事業を総括すると、子どもから高齢者に広がる取り組みにおいて、少数者の自由と人権の価値を問い直し、日本では認識されにくい「移民」問題に向き合い、取り組みを進めてきた歩みです。

子どもから高齢者まで困難な状況を抱える多様な文化背景を持つ外国人・マイノリティ（「移民」）に必要なことは何かを当事者の声に耳を傾け、解決や改善に有効な方法は何かを多くのボランティア、協力者の力を得ながら考え、できるだけ当事者が関われる形で事業を進めてきました。

時には、文化本質主義的交流、ステレオタイプな異文化理解・交流を求めるマジョリティや当事者(外国人)の中で力を持ち大きな声を出す人たちの意見と衝突することであっても取り組んできたように思います。

私たちKFCの事務所・施設では、現在、中国語、ベトナム語、韓国・朝鮮語、英語、スペイン語、モンゴル語といった多言語が日常的に飛びかっています。

KFCは、現場で多様な言葉や文字が多く使われていることが、多文化共生の尊重、象徴として取り上げられることも多いですが、そのことよりも大切にしていることは、運営におけるマイノリティ・外国人の参加（単なる参加を超えた決定への参加も含めた参加）と協働です。

さまざまな事業を外国人と日本人がともに支え、担い進めてきました。言葉が通じなくとも、文化が違って人への共感、やさしさ、おもいやりは、国や民族を超え共に支える場を作っています。私たちが、葛藤や衝突を踏まえながら到達した地平を、人を排除せず、ともに生きる、生きられる先例としてこれからの社会、世界に伝えていきたいと考えます。

これからの日本の国際化は、異なる文化背景を持ち、異質で貧困や孤立など困難な状況を抱える多くの移住者や家族（移民）の現実とどう向き合うかを問われていくのではないかと考えます。

多文化な背景を持つ人が集い生きるには、さまざまな困難がありますが、外国人・マイノリティ（移民）の生活と真摯に向き合い事業を続けてきた法人としての経験を糧に、これからも少数者の自由や人権を守る取り組みを進めていきたいと思えます。（理事長 金 宣 吉）

■■■KFC日本語プロジェクト■■■

◆2015年度文化庁事業「地域日本語教室を考える」

2月20日（日）、神戸国際協力センター会議室においてKFC主催の2015年度文化庁事業「地域日本語を考える」の研修会がありました。参加者は34人でした。神戸には数多くの日本語教室がありますが、その地域日本語教室の役割・状況・課題とそこで中心的に活動している多数のボランティア支援者の現状の紹介がありました。

<第1部> 基調講演

「地域の日本語教室について～地域日本語教室の役割と課題～」

長嶋昭親（前兵庫日本語ボランティアネットワーク代表）

兵庫県在住の外国人は約97000人で、上から、韓国・朝鮮人が48%、中国人が24%、ベトナム人が7%となっており、最近ではフィリピン人・ネパール人が増えています。中国帰国者・インドシナ難民・（日系人）労働者・日本人などの配偶者・技能研修生・実習生及びその家族への日本語教育・学習支援においては、地域の日本語教室が大きな役割を果たしています。そこでは、日本でよりよい生活をするための日本語の習得、地域住民との交流、キャリアアップのための支援、

子どもたちへの支援の活動を行っています。日本語学習支援（識字教育）の根本理念として、ユネスコの“学習権”（学習権とは、人間の生存にとって不可欠な手段です。学習権なくしては、人間的発達はありません。）を挙げています。今後の課題としては、地域に根ざした・学習者主体の・地域社会への参加に繋がるような学習支援活動、どこでも学べるシステムづくり、外国から来た子どもたちが未来に展望を持てる学習支援システムの創生、学習支援グループ・生活支援団体との連携などがあります。

<第2部> パネルディスカッション

「地域の日本語教室 各団体の活動の成果と課題」

コーディネーター：青木直子（大阪大学大学院教授）

神戸国際協力交流センター（KICC）、東灘日本語教室、神戸学生青年センター、実用日本語教育推進協会、神戸中国帰国者日本語教育ボランティア協会、神戸定住外国人支援センター（KFC）から、それぞれの現状・成果・課題についての説明がありました。設立から数10年が経過し、社会環境も大きく変化しており、その中で多様化した個人のニーズにいかに対応するかを模索しているようです。

<第3部> プレゼンテーション

「日本語ボランティアとして、私が得たもの」

発表者：高橋博子、河南亜都、川淵啓司、柴田遥子

4人の方から、支援者と学習者・KFC・兵庫日本語ボランティアネットワークなどとの横のつながり、“教室・教科書・教師からの解放”をキーワードとした活動、退職後の日本語ボランティア活動、学生としてこの活動に携わったきっかけ・得たものなどの説明がありました。

最後に、青木先生から、個人のニーズの多様化にどう対応するか、学習者の日本への同化ではなく自立生活の意識・社会への参画のイニシアティブにどう応えるか、子どもから大人までの普通の人々が普通に暮らすための術をいかに伝えるか、財政面の安定化などの課題があるが、学習者と共に学ぶ気持ち、試行錯誤を厭わない気持ち、教室内及び教室間の連携、仲間を増やすことによる意識のシェアの重要性などの説明がありました。（ニュース係 川淵 啓司）

■■■ KFC外国にルーツを持つ子どもの学習支援 ■■■

◆ 年末お楽しみ会

私たち甲南女子大学2回生の野崎ゼミ13名は、2015年12月24日木曜日に「KFC年末お楽しみ会」を開きました。会場はKFCから徒歩10分ほどの神戸市地域人材支援センター（旧二葉小学校）の調理室をお借りしました。当日はKFCの小中学生合わせて約20人が参加し、その中で四、五人ずつのチームに分かれて、みんなでパンケーキ作りとデコレーションコンテストをしました。

パンケーキ作りでは、チームごとに分けられた調理台で、子どもたちが互いに協力しながら仲良く作業をしていました。材料を準備する人、ボールに入れる人、混ぜる人、調理道具を持ってくる人など、チームで上手に役割分担をしながら作っていました。そして、各自で作ったパンケーキにカラフルなチョコのデコレーションやクリーム、フルーツを乗せて、一人一人の個性があふれた可愛いパンケーキが出来上がりました。また、それぞれチョコペンで自分の好きな絵や文字を描くなど、器用にパンケーキの飾り付けをしていて、みんな絵が上手くセンスがあるなど大変驚かされました。パンケーキを作っているときの子どもたちは本当に楽しそうで、みんな夢中になって作っていました。

コンテストでは各班の作ったパンケーキは、厳正な審査のもと、出来映えによる一位から四位の賞に加え「チームワーク賞」が選ばれ、各チームに賞品が贈られました。賞に選ばれた子どもたちが喜んでくれたのはもちろん嬉しいことでしたが、自分のチームが賞に選ばれなかったときも、相手のチームを祝福している子どもたちの姿を見て、年齢など関係なく素晴らしい姿勢だなと思いました。

また、お楽しみ会が終わった後には、残っていた子どもたちが率先してお皿を洗って拭いたり、シンクの汚れをきれいに布巾で拭くなど、一緒に後片付けを手伝ってくれてとても助かりました。5月から子どもたちの学習支援に参加してきましたが、このように子どもたちと一緒に作業していく中で、普段の学習支援の活動ではあまり見ることのない子どもたちの新しい一面をたくさん発見でき、企画者側として大変嬉しかったです。

私たちはこの年末お楽しみ会の企画を、数回のゼミを通じて学生間で意見を出し何度も話し合っ準備を進めてきました。様々な項目を決めてゆく中で、来てくれる子どもたちに喜んでもらうためにはどうすればよいか？子どもたちのことを考えながら、たくさん悩みながらも、ゼミ生みんなで一生懸命になって考えました。今回の年末お楽しみ会は、KFCの生徒たちへの企画ではありませんでしたが、私たち企画者側もこの活動から多くのことを学ばせていただき、大変良い経験になりました。子どもたちがこれからも明るく元気に過ごすこと、そして同じような環境下にいる子どもたちにとっての希望となるような存在へ成長してゆくことを、心から願っています。(堀愛輝子)

◆インターン研修会に参加して

私は兵庫県立大学4回生の高橋愛満です。昨年の11月からインターンとして学習支援活動に参加しています。昨年の9月まで一年間アメリカへ留学していました。そこで初めて、クラスでたったひとりのアジア人というマイノリティ経験をし、また授業でも人権について深い学びを得たことをきっかけに、日本の多文化共生に関心を抱くようになりました。現在は週2回の学習支援を通して小中学生と関わることで、彼らの視点から“日本で暮らす”ということを考え、私にできることや彼らにとってどういう存在でありたいかを思い巡らせながら活動しています。

先日、2月22日に金宣吉理事長によるKFCの理念や学習支援をする意義について学ぶ研修会と5人のインターンによる事例発表会が行われました。参加者は支援者・インターン・スタッフあわせて17名でした。研修会の中では、「移民」の子どもたちの進学率が著しく低いこと、またその事実が表に出ることは少なく、本来この問題に取り組むべき役割の人たちもその役割を担おうとしていないことを知りました。日本は外国にルーツを持つ人たちが居場所を見つけ、社会参加をしていくには無知・無関心で、人権を語るには距離の遠い国でした。“何も問題はない”と思い込むほうが楽ですが、解決すべきことがあるのが事実です。その現状に対してからだを張って活動をしているKFCは、ある人にとっては非常に勇気づけられる存在であり、ある人にとっては“目の上のたんこぶ”であるのだと思います。そして目の上のたんこぶほど意識させられるものもないので、やはりKFCが在り続けることには大きな意味があると思いました。

インターンの事例発表会を通してキーワードとなったのが、“愛をもって褒め、叱る”ということです。私の主観では、KFCにいる子どもたちの大半は自分の意見も私に対する指摘でも、はっきりものを言えます。この背景には、関わっておられる大人の方と子どもたちの間に強い信頼関係が築かれていることが大きいと思います。子どものためを思うこととは、ただ優しくすることではありません。子どもたちと真剣に向き合い、褒める時も叱る時も、そこに愛があればこそ本当にその子の心にまで届きます。KFCではその積み重ねによって、子どもたちが居場所を感じてのびのびと振る舞うことができているように思います。ただし愛というのは心に余裕がなければ

簡単に抜け落ちてしまうので、子どもと接する時にはひと呼吸おいて、意識的にスペースを造っていきたくて思いました。

私にとっては留学が、自分のこれまでの立場や価値観がひっくり返り、全く別の視点から社会を見るきっかけとなりました。日本で私は、さまざまな権利が何もせずとも“自然に”与えられてきたことに気づきました。少数のひとが抱える悩みは多数側にいるひとが気づき、共に声を発しなければなかなか根本的に変わっていきません。「これは誰かの問題ではなく、私の、社会の問題だ」という意識を広げていくために必要なことは何か、そのために私はどう在れるのか…。まだ答えが出る兆しはありませんが、まず目の前の子どもとの“今”を愛をもって関わろう、と心に決めた一日でした。（高橋 愛美）

■■■ KFC中国帰国者支援事業 ■■■

◆中国「餃子」への解読

ずっと日本で生活しているので旧暦への意識が徐々に薄くなり、一年中に意識してわざわざ万年歴で旧暦を調べるのが旧正月ぐらいでした。2016年の旧正月は2月8日から始まりました。2月9日（火）にKFCが帰国者の新春会を開きました。帰国者たちは例年と同じように中国の北の地域の旧正月の定番料理——餃子を作りました。しかも焼き餃子ではなく、馴染んでいた水餃子でした。中国の北と南の地域の食文化がかなり異なるので、帰国者たちの出身地域では、旧正月の際に必ず餃子を作ります。これは習慣として定着しています。今年の具材は餃子の定番具材——白菜と豚ひき肉でした。帰国者は同じ東北地域の出身で、味付けは人によってそれほど違うところはありせん。

海外で中華といったら餃子がすぐに思い出されます。中国では、いまでも、家に大事なゲストが訪れる時、ホストの手作り餃子がおもてなしです。従来、貧しい時代では餃子が最高の料理であったとされ、現在、ある程度豊かになっても餃子が諸料理の中で依然として重要な位置を占めています。その重要な位置は餃子そのもののおいしさからではなく、手間がかかるからではなく、その象徴的な意味からです。貧しい時代に、ホストは普段の食糧（小麦粉、肉、油など）を節約してゲストをもてなします。餃子は、中国人がいつも親切な心で遠くから来られたゲストを大事にする気持ちが最も表現できるものです。（胡 源源）

◆交友～映画「山の郵便配達」を観て～

友達をたくさん持っていれば道が広がるということわざがあります。友達は資源であり、生活の中で友達は人間の脈のような離れられない存在です。人と人の付き合いは互助、心遣い、善意、理解、正直が必要です。友達の間はお互いに助け合ったり、人に優しく扱ったりすると、倍、優しく扱われます。その優しさを心に銘じます。誠心誠意が何よりも友達作りの一番なものです。（村上 秋子）

◆日本語学習と禁煙

最近私は二つを変えることを決意しました。それは、二つとも自分にとっていいことではないからです。

一つは、これから日本語教室で中国語を使わないで日本語だけを使うことです。日本つまり自分の国ではその国の言葉を使い、ちゃんと身に付けるべきだと思うからです。

私は現在、日本語だけでなく中国語も学んでいますが、日本語を学ぶ日本語教室では日本語だけを使うべきだと思います。

私が通っている日本語教室で多くの学習者は、授業以外の時間に教室でも全ての会話に中国語を使っています。

彼らを見て私は、彼らの中国語がなぜそんなに上手で、どのように身に付けたかを彼らはよく考えてみるべきだと思いました。もし中国語と同じ方法で日本語を学べば必ず上手になれるのではないかと私は思います。

もう一つのこと、私には喫煙というなかなかやめられない悪い習慣があります。禁煙はそう簡単にはできません。ここでみなさんに宣言しておきたいことがあります。今年の5月以降私は絶対にタバコを吸いません。（村上 弘治）

■■■ グループホーム・小規模多機能型居宅介護八ナ ■■■

◆フラワーデザイン教室の取り組み

2月20日午後1時より 1階でグループホームと小規模合同でフラワーデザイン教室を開催しました。講師は若松町3丁目の角の花屋さんの小出裕子さんです。

以前に花を買いに行った時に声をかけられ、一度介護施設八ナで企画をしようかという事になり2月20日を予定しました。

当日は1階のテーブルに集まり、まず講師の話の話を聞きました。それから利用者さん用の花が配られました。（ミモザアカシア、アルストロメリア、ガーベラ、スプレーストック、レモンリーフ）吸水性スポンジにアレンジメイトで開始です。

95歳の認知症のAさんは、持ち前の手際の良さで30秒で活けてしまわれました。またBさんは、昔、生け花の経験があり、花を前にしてその流派らしい活け方をされていました。

また各階の活け花は、それぞれのスタッフにお願いしました。20歳のスタッフは「センスがないからダメです」と言いながら、華やかに花を挿していました。そして活け終わった後、「なんか気持ちがいいですね。僕も生け花にはまりそう」

利用者さんは自分の部屋に持ち帰り飾ってもらいました。一足早く春が訪れました。（山根香代子）

◆第2回事例検討会開催

2月25日に第2回事例検討会を行いました。

今年は小規模多機能が加わり、演題は小規模多機能から1題、グループホームから2題そして看護部門から1題です。

4演題の内容を見ると2つに大別されます。一つは認知症の利用者への取り組みでした。小規模から『意思疎通が困難な重度認知症利用者との関わり』というテーマで、利用から1年以上小規模で宿泊を継続してきた利用者さんの変化が報告されました。もう1演題は2階グループホームから『Tさん「心と身体機能」』で、短期間に著しく認知症が進行していったケースが紹介されました。

もう一つは、医療処置を伴うKさんを“入院させない”という目標を掲げて1年以上、処置とリハビリに取り組んだケースを、介護と看護の立場から報告を行いました。連携プレーで実践してきた取り組みがテーマです。

今の私たちの現場で起こっている事を、まとめそして形にし発表に繋げました。18名の参加でしたが、特徴は休みのスタッフが多数参加したことです。金理事長から、このような良いことをしているのだから、家族の人に、もっと現場から発信していきましょうというまとめで終わりました。（山根 香代子）

■■■ 八ナの会■■■

◆楽しみにしてもらえ屋食づくり

年が明けて二月になりましたが、まだまだ寒い日が多々ありますね。

私は調理を担当しています朴百合子といます。八ナの会に来て六ヶ月になります。初めは色々とはとまどいもありましたが、毎日色々とおかずの事や素材がよく、安くておいしいお昼ご飯が出来るように考えて、月曜日から土曜日までおかずが重ならないようこころがけていますが難しい日もあります。皆様がお昼ご飯を楽しみだと言ってくれています。少しホッとした部分もあります。

スタッフの方々にはとてもよくしていただいています。敬老の日、節分の日、クリスマスの日と中々大変でしたけど、利用者様のありがとの一言でまた頑張ろうと思います。

また利用者様のさまざまな大変な話を聞くこともあり、少し憂鬱になる時もありますが、自分で嫌にならないように考えて楽しい話をしたり、笑い話に変えて頑張っていこうと思います。(朴百合子)

■■■ 今後の予定■■■

■日本語プロジェクト

3月19日(土) スピーチ会 於 ホテルサーバスタ

■KFC新長田交流会

3月13日(日) 神戸国際交流フェア舞台出演

3月22日(火) 映画鑑賞

■ベトナムデー

3月17日(木)